

五

近時、我國には全体主義と個人主義との對立が唱へ

られた。而して大まかに西洋は個人主義、東洋は全体主義と

考へられた。居つかの如くである。西洋文化を無造作に個人

主義と云ふのも、^{フレイマの}無造作の過つと思ふと共に、全体主義

と云ふのは、^林林^{ツツシヨ}ツツシヨやナキスの模倣^之、^性之

又、我國自身の立場を立て考へようとする人は皇道と云

ふ。併しそれは多くは信念であり感情であり、唯歴史的事実

を述べると過ぎない。寡聞にして未だその明確なる概念を^的概念を

聞くことはできない。無論皇道と云ふが如きものも概念化

印

×であり、^{情は情}信念は信念として何処までも委しむべき

×あり其の冒瀆^とあり

すこと、その事が、非皇道的^{考へられ}である。其は
西洋の主知主義と云はれ、^{考へられ}でもあろう。併し私に「^{考へられ}」
て述べた如き理由によつて、^{考へられ}かゝる考へ方に反対するもの
である。事實は事實として動かすべからざるものである。^{考へられ}
併しそれが信念として我々の行為の立場となる時、それが
概念的必容が入つて来なければならぬ。信念は單なる感
情であつてはならぬ。然し、^{考へられ}信念は概念的必容
が入つて来るとするならば、それは何処までも論議すべき
ものであり、^{考へられ}何処までも客観性を有つたものでなければ
ならないであらう。

何千年來皇室を中心として生々發展し來つた我國文化
 の迹を顧みると、それは全体的一と個物的多との矛盾的自
 己同一として、作られたものから作るものへと、
 何れも作ると云ふこともあつたのではなからうか。全体的一として歴史に於
 て主体的なものは色々變つた。古代に於て既に蘇我氏
 の如きものがあり、それより藤原氏と平氏とが、明治
 維新に至るまで、鎌倉幕府を始として足利徳川と變つた。
 併し皇室は此業の主体的なものを超越して、主体的一と
 個物的多と矛盾的自己同一として自己自身を限定する世
 界の位置にあつたと思ふ。全体的一として個物否定的な

何れも作ると云ふこともあつたのではなからうか。全体的一として歴史に於て主体的なものは色々變つた。古代に於て既に蘇我氏

日本文化

社會と云ふものは、上と下とあり、矛盾的自己同一的存
 世界の種として、即ち歴史的種として成立するのであり、自
 己自身を否定して世界となることによつて自己自身が生
 きるのであると云つた。人間の社會は世界（絶対矛盾的自己同一的）の自己限定と
 して社會であるのである。我國の歴史に於ては、如何なる時代
 に於ても、社會の背後に皇室があつた。源平の亂戰（氏族と氏族とのは主体的
 闘争である。併し頼朝は以仁王の令旨（上よつて）を以て立つ
 た。尊最も皇室式微と考へた。水口のは足利末期である。併
 し先利元就が陶晴賢を討つた當つて勅旨を乞ひた。我國の
 歴史に於て皇室は何処までも無の有であつた。矛盾的自己

四三三三三

×過去と還ることとは單に過去と還ることなく、
永遠の今の自己限定として一歩

同一であつた。それが紹介せられて明治に於て欽定憲法となつて現れたのであろう。故に我國に於ては復古と云ふことは、いつも維新と云ふことであつた。其れは前へ歩み出すことであつた。主体が環境を環境が主体を限定する。一つの世界^{世界}が成立するとは、其れがその環境に應じて主体的なものになければならぬ。併し世界は相互的的自己同一として何処までも作りだすものから作るものへと動いて行くのである。蘇我氏藤原氏以来我國歴史に於て主体的なものとは、それやその時代を於てその^{其れ}の^{その}相續の時代の^{その}擔い手

日本文学

西田用紙

主体もはや環境に適合しない、即ち社会形態が

として、~~何~~水環境如何なる~~社会~~行詰りした時が来なけ
 水はなすな。歴史が生きたまのイあるかギリ。然らざるを
 得ない。走那ではか、~~了~~場合が易世革命となつた。我國では
 そ水がいつも皇室~~攪~~返つと云ふことであつた。復古と云ふ
 ことであつた。そしてそれはいつも昔の制度文物を返つと
 云ふことではなく、逆より~~世~~新なる世界へ歩み出すと云
 ふことであつた。明治維新と云ふ如きものが最も之を明し
 して居ると思ふ。私はローマ以来ヨーロッパは一つの世界で
 あつたと云つた。キリスト教が中心となつて申せ以来一つ
 の世界が構成せられた。~~その~~盛時に於ては、~~時~~皇帝が法王の~~許~~得~~べ~~扱

日本文化

と云つてよからう。

三三三

日本文化

二三日も立ち続けなければならぬ。二ともあつた近代
 に入つて、ヘンリ八世の如き強大を以てしても、尚皇后と離
 別するたため法王の許を得べく稀めた。無論近世ヨーロッパ
 於ては、種々の個性を有つた強大な國家が發達し、相對し相
 争ひ居ると云ふよりもあつた。併しそれはヨーロッパが一つ
 世界でなくなつたと云ふことではなく、却つて外的に
 一つの世界となつたと云ふことである。法王の政治的權
 力と云ふものは、世界の的と云ふよりは寧ろ主體的と云ふ得
 るであらう。中世では尚主体が主体に對した考へ得た
 ありう。近代のヨーロッパは、諸國々が一つ

たゞそれた如き

現

近世に入つてから

勢

いふべき

尚眞の世界と云ふものはなかつたと

眞

日本文化

の世界に於ての主体的なるものとして對立したと云ひ得
 るであらう。身土のグローセとエキの如く、^{強國論}而してランケ^が
~~林~~ ^様 ^々 ^の ^國 ^家 ^が ^主 ^體 ^的 ^と ^し ^て ^そ ^の ^水
 此の歴史時代を擔ふたと考へ得るのである。主体と環
 境との矛盾的自己同一として世界が自己自身を形成する
 事といふ時、世界は空間的から時間的と云ふことができ
 る。空間的より越へた國々が時間的より一つになつて行く
 と云ふことが出来る。世界は空間的・時間的より自己自身を形
 成して行くのである。ヨーロッパは^{歴史}空間的・時間的^へと一
 つの世界となつて来た。我國の歴史に於てはもとより

西田用

△歴史以前の
日本が如何な
了ものにあつ
たか。

X之と包手水た。皇室は時間的と世界的であつた。

世界的なものは時間的^{から}と空間的^{へと}なると云ひ得

るのである。我國の歴史と於ては、主体的な^{ものは、皇室を}

^{時間的・空間的な}空間と場所として、~~縦~~相並み合ふべき時間的と縦は

主體的なものである。前者と於ては世界は

横から縦へ、後者と於ては縦から横へと云ふことができた。

日本歴史は世界歴史の縮圖とも考へるべき(原勝郎) ^{私は今}

歴史以前の日本が如何なるものか分は知らない。それは

種々な種族と云ふ如きものがある。たゞ、^{たゞ}

横から縦へと日本歴史が成るばかりか、^{たゞ}

歴史家の立場から論じて居るのではない。我國歴史の

日本文化

日本歴史を

何千年来の

四三三三三

思想的

主顧みて、我國の歴史の発展の背景は、
 があつたと云ふのである。支那の歴史も、
 史的として、その中心思想となつたものは、
 あうい、天子は天命を受け、天子となつて、
 の民族は、人間は天から生れたもので、
 ものと信じてゐたと云ふ。周代と云ふのは、
 なるものの對立、
 儒教の天の思想の基となるもの、
 あり、如き世史的なものが形成せられたので、
 あり。

思想

日本文化

西田川紙

日本文化

所謂精神の精神的

主体が環境を環境が主体を限定し、何処までも個物的多と毎時的に
 矛盾的自己同一的自己自身を根柢する世界の種
 として、即ち歴史の種として成立する我々の自身自身を形成する社會は、自身を形成するその根柢に世界構成の
 原理を有つて、非なければならぬ、即ち理性的でなけ
 ればならぬ。そのかぎりそれは生きるものである。理性とは
 世界構成の原理でなければならぬ。何れまでも主体と環
 境とが相對立し、~~否~~主体と主体とが對立し、何れまでも
 何人間と自然と、人間と人間と人間との矛盾闘争を地盤と
 して、~~非~~其發展し来た西洋社會の構成原理は、自ら概
 念的理性的たゞざるを得ない。西洋文化が知性的と考へる

四田川

日本文化

此の所以である。之より反し東洋文化は行的と云はれり、道德
 的と考へり。学~~は~~ではなくして教であること云はれり。併し、
此等の語は亦此世最能く儒教的支那文化に當嵌まるのてなからうか。緒あり、支那の
 文化は禮教的であつた。而して其の儒教的に、その背後に天
 理と云ふものが考へられた。人間の道は天の道である。
 天命之謂性、率性之謂道、修道之謂教。宋代に於ては、獨り此れ一種
史的意義を有する世界的構成原理と一種の哲学が構成せられた。理
 は天人合一の理である。支那文化に於ては、西洋文化に於て
 の様に、自然と人間との對立矛盾が何処までも深く考へら
 れてゐない。自然は主体的な自然である。人間的な自然であ

西田川

X 作るものか、作るものへといふ

日本文化

る。主体と環境との矛盾的自己同一として何処までも作
 られたものか、作るものへといふ歴史的形成作用ではない。
 それは何処までも ~~X~~ 創造的な歴史的自然ではなかつた。支那
 文化に飲かれたものは科学であつた。支那民族が ^(彼の如き) ~~文化~~
 世界構成原理によつて自己自身者の文化を構成したと
 云ふことは、それ相當の理由があるのである。 ^(それは歴史的世界に於いて) ~~それは~~ 支那民
 族の置かれた歴史的 ^(位置) 位置空間の俾相によるのである。 ^(それは) ~~それは~~
 種の歴史的空間の位相位相とも云ふべきである。然るば
 我國文化の根柢をなす世界構成原理とは如何なるもの
 であるか。東洋に國して生々發展し来つた ^(我國民の) 我日本文化の

西田川紙

漢世

佛教的

う。~~漢世~~ ~~佛教的~~ 道義を國本と云ふのは、深く我國文化
 の「~~漢世~~」の髓を徹せざるものである。我國の國民思想の根柢は、
 建國の事實と云ふものがあつた。唯歴史的事実が、~~漢世~~と
 云ふものがあつた。而して我々は之を中心として軸として
 一つの歴史的な世界を形成し行くと云ふことであつた。皇室
 と云ふものが、~~漢世~~ 矛盾的自己同一的な世界として、~~漢世~~ 過去
 去来 ~~を包む~~ ~~を包む~~ 同時存在的な永遠の ~~今~~ 親縁として ~~今~~ ~~今~~ ~~今~~
 こそ、~~漢世~~ へと云ふのが、万民輔翼の思想でなければならぬ。故
 に我國民の道徳と云ふのは、歴史的な世界の建設と云ふこと
 でなければならぬ。我々が何処までも自己自身を捨て

日本文化

四三三三

×と云ふこと、何処までも作りたものから作るものへと

我國道徳の精華は歴史の創造

て、我々の自己がそれか「それ」へと歴史的世界の建設に奉仕する[×]歴史的世界の建築者となすと云ふことが、國民道徳の精華であつたのであろう。それは道徳の根柢と実践理性と云ふものを置くことでもなければ、仁義と云ふ如き人情を置くこと云ふことでもない。無論私は~~は~~毫も此等の支那の天命と云ふのは思想であつて事實ではなかつた。理であつて事ではなかつたと思ふ。^{（無論）}私は毫も理性とか人情とか云ふものを~~軽視~~^{（さう）}と云ふのではない。個物的多と全体的一との矛盾的自己同一的~~な~~世界の自己限定は必然的^な此等の契機が含み込まなければならぬ。唯種々なる民族思

日本文化

西田用紙

日本文化

の思想的傾向を区別するものは、それこそ其の特色を擧げなければならぬ。私は我々^{の日本}民族^{の思想}の根柢^{の根柢}を在り
^{となつたものは、}歴史的に世界の自己形成^のの原理^のがあつたと思ふ。
 東洋の一孤島^のとして、何千年來殆んど閉ぢられた社會と
 して、独自の發展を成し^{まつた}日本民族は、日本と云ふものが
 即ち世界であつた。日本は縦の世界であつた。日本精神は日本
 歴史の建設であつた。併し今日の日本は、もはや東洋其の
 一孤島の日本ではない。閉ぢられた社會ではない。世界の
 日本である。世界を面して立つ日本である。日本形成の原理
 は即ち世界形成の原理とならなければならぬ。此^の大^の

なる問題があると思ふ。私は最も戒むべきは、日本を主体化
 することであると思ふ。それは皇道の霸道化に過ぎない。そ
 水は皇道を帝國主義化するにとり外ならない。古くは王では
 日本は即世界であつた。皇道とは我々がそとからそとへ
 といふ世界形成の原理であつた。日本は北條氏の日本でも
 なく、足利氏の日本でもなかつた。日本は一つの特殊歴史的
 主体ではなかつた。我々は我々の歴史的発展の底に、世界性
 矛盾的自己同一的、~~本~~世界そのものの自己形成の原理を見
 出すことによつて、世界に背負つた責任をなすべし。それは
 が皇道の發揮と云ふことであり、八紘一宇の眞の意義にな

日本文化

ければならない。云々までも歴史は事実の世思であり、歴史
~~印動は力であり、我々の歴史の根柢である~~ 世界形成の原
 理を發揮すると云ふことは、幾日本が歴史的主体でなくた
 ると云ふことではない、日本が日本でなくたと云ふこと
 ではない。歴史的な世界形成の原理は、個物的多と全体的一と
 の矛盾的自己同一として、個物は何処までも個物的たると
 共に、全体的の一として主体は何処までも主体的となる、種
 は何処までも種となると云ふことではない、種はなすな
 りたものから作られたものへとして、世界は公の産物として
 結合して行く、即ち ^{歴史的} 創造世界を創造して行くの

×種が行動の主体となすなければならぬ。

カの世界である。

四四四

である。

✓

一りアキ

それでは右の如き、日本精神は如何なるものであり、今後如何に發展すべきであらうか。我々はいつでも歴史の創造に對して居る。我々は何処までも作らなくてはならないのである。何処までも歴史的^的創造的として我々の^暗ものは、單に我々人間の作つたものではない。我々人間の主觀と非、小から出立して何処までも超個人的に考へる水は理性と云ふものでもない。何となれば、水は人間を作るものが故である。それならば、それは單に非合理的なものであるか、單な

日本文化

四三三三三

哉。時代の建設者である。それは歴史的世界の事実として
 考へて、歴史的世界の自己表現として、キリスト教徒の人々
 の考へる「言葉」と云ふ如きものとも考へるべきである
 う。併しそれは外から聞かれる超越的な神の言葉ではなく
 して、現実の世界の中^中から聞かれる言葉である。なげればならな
 い。而もそれは作らぬものから作るものへとして、單に合
 理的と云ふことではない。物となつて考へ物となつて行ふ
 我々が歴史創造子となつて行ふこととなつて云ふことは、何れまでも
 科学的と云ふこと^がなげればならぬ。徹底的に科学的と
 云ふこと^がなげればならぬ。何れまでも物の眞実に行ふ

日本文化

と云ふことではなければなるない。それは神の言葉と聞くと
 云ふことではなければなるない。それが神ながらの道^{と云ふこと}をなけ
^{である。}ればなるない。それは生々発展の道でなければなるない。唯
 原始自然的と云ふことであつてはなるない。物となつて考
 へ物となつて行ふと云ふことは自己の現実を尽す^{と云ふ}ことでは
 なければなるない。現実の自己と云ふのは絶対矛盾的自己
 同一の世界の自己限定として、~~我~~歴史的現実を於て作る水
 たものとして与へられたものである。而して作る水たもの
 から作るものとして、何処までも作り行くものである。物の
 眞実^に行くこととは、自己の眞実^に行くことではなければな

ふ

田川

ない。矛盾的自己同一の世界と云ふのは、機械的の動き行
 く世界でもなければ、唯唯合目的の、生物的の發展し行
 く世界でもない。表現的の自己自身を形成し行く世界であ
 るのである。推論式的の自己自身を限定する世界であるの
 である。個物は何処までも表現作用的の世界を形成すること
 共、逆の自己が世界の自己形成の一つの仕方であること
 によつて個物であるのである。我々の自己が真の個物的で
 あればある程、我々の自己は絶対の表現に對するのである。
 天命に對するのである。我々の生死を迫るもの、對するの
 である。我々が物となつたと云ふことは、歴史的世界の自己形

目録又也

成の一つの仕方として、歴史的事物となつたと云ふことであ
 る。それは物質となつたと云ふことでもなければ、生物的とな
 ると云ふことでもない、原始的な自然となつたと云ふこと
 もない。それは何処までも具体的理性となつたと云ふこと
 なければならぬ。それは何処までも論理が尽されなけ
 ればならぬ。唯それは論理の為の論理と云ふことではな
 い。自己を尽すと云ふことは、右の如きことでなければなら
 ない。東洋精神の樞軸は無心にありと考へる（鈴木大拙）
 無心と云ふことは、^は單に無分別とか如赤子とか云ふこと
 ではない。道元禪師が支那から帰つた時、~~曾~~曾何と云ふ

何と云ふて来たかといふ人の問へて
 答へて

答へて

日本文化

(佛蘭西の事)

常得たもの
 何も取立てて云ふことは
 ないが唯「柔軟心」を得たと云ふたと云ふ。柔
 軟心と云ふことは、眞の物となつて考へ物となつて行ふこ
 とでなければならぬ。東洋文化は知と對して行であつたと
 云ふ。併し如何なる行も何等かの知的内容がなければな
 らない。自由にして今日然るは儒教的な知的内
 容を入れて居るならば、我々は今日其の時代性を吟味し
 て見なければならぬ。私は儒教の以て會するに居る貴族
 的の非達々々間的な性人間に永遠的なるものな
 否定するものではない。併しそれは單に永遠的なるものでは
 ない、環境に離れたものではない。それは何処までも

西田用紙

日本文化

科学的に論議せらるべきものでなければならぬ。唯従来
 西洋の科学と云ふのは、主として環境から人間を考へ、
 自己と云ふものが^{その}世界の中に入り居るない世界の
 知識である。そしてそれが科学と云ふ所謂対象認識の学で
 ある。無論それが科学と云ふものであろう。併し眞に具体
 的な歴史的存在の世界は、我々の自己がそれを於てある世
 界で^{なければならぬ}眞の学問的精神と云ふもの^が日々が物のと眞実に行
 く^{と云ふ}ものがあるならば、眞のそれは何処までもかゝる
 世界を把握するものでなければならぬ。実證的^なあり
 実證的なものでなければならぬ。

西田川

主体が環境を環境が主体を限定し、個物的と全体的との
 矛盾的自己同一として、世思は作られたものから作られた
 のへと、イデオロギイ的自己自身を形成して行く。そして、
 人間性^的の種々^的行動^がは文化的であるのである。併し、
 我々人間の行動に於ていつも両方向が対立する^{と云ふことが出来る。即ち}主体から
 環境へと環境から主体へとである。文化はいつも両者の矛盾
 的自己同一^{と云ふので}である。いつも両者の矛盾的自己同
 一^{と云ふので}であるが、西洋文化は大体に於て環境から主体へと考
 へられるものであり、東洋文化は之を反し主体から環境
 へと考へられる併し何れも環境から主体へと云ふ二

日本文化は矛盾的自己同一の世界の相互する両方向に重心を

両者は

有つと云ふことが出来る。

×ある、事、於て一となるのである。

とは、自己矛盾的に環境が主体自己自身を否定して主体的
となつてなけりばならぬ。世界も具体的となればなる程、世
界は辯證法的に考へられ来るのである。之に反し何処に
ても主体から環境へと云ふことは、自己矛盾的に主体が自
己自身を否定して環境的となる。↓
(物となつて云ふこと)でなければならぬ。
両方向は具体的自己自身を限定する世界の事物に
於て結合するので、~~概~~両方向の對立は、~~固~~是れからであり、結
合は、~~も亦~~是れからであるのである。私には日本文化の特色と云ふ
のは、主体から環境へと云ふ方向に於て、何処までも自己自
身を否定して物となつて見、と云ふことにある

日本文化

物となつて行ふ

西田

日本文化 野田

尚對立^{するもの}を結合といふ意義を脱することにはできない。私には、
 日本文化と云ふのは、^{心から立つ}存の如き觀念から世界を見ること、
 その特色を有するのではないと思はれる。それは理より^心事^心と云ふことでもある。理と事とは具體的^心に矛盾的自己
 同一的でないならばない。事を離れた理は空理であり、理
 を離れた事は單なる偶然^た下^たり過ぎない例へば、日本へ
 佛教が入つて来た時、華嚴とか天台とか云ふ如き理智的な
 宗教が傳へられた。煩瑣な哲學的宗教であつた。併しそれは
 漸々簡單化せられた。実践化せられた。理から事へとなつた。傳
 教の天台は源信に至つて既に大に易行化せられた。実践化

理と事と一致する
 心
 狭う事の無礙である

×大の方向が法然親鸞の^{の浄土教となり}親鸞に至つて^{實に}独自の

日本の宗教が^{まで}展開発展したのである。

自來の^{體驗的}教

世々水た。一心三觀は^{體驗的}天眞独朗の^{一語を以て示された}島地
大等^親は建築のことは分らないが、試す夕ウト^上水は
^所母^母彼は永遠の美とは、藝術品がそのやうな形式を得た
胎た^{一切の事物}(園土、風土等)の^{全体}上つて課せられた
諸の要求を、最も純粹^{且つ}力強く充足し得りする^{とある}
と云で、伊勢神宮は人間の理性を^{反撥するやうな}与給水な
要素を一つも含んでない、その構造は單純であるが、併し
その自体論理的である、構造自体がそのまゝ、美的要素を構
成して居ると云ふ。その美が日本の風土に於てのバルテロ
ンのものと考へて居る。すへての物を綜合統一して、簡單

日本文化

四三三三

× 絶対否定を通さなければならぬ。

日本文化

明瞭に、易行的に把握せうとするのが日本精神である。それが物となつて見物となつて行小無心の境地^{無心の境地である。}自然法爾の立場である。そこの我々は天地の矛盾的自己同一に觸れるのである。易行と云ふことは、安易に物考へ、安易に行小井と云ふことではない。天地をそこの單一化する事である。天地こそこの一表現を与へる事^{この表現を}見出す事である。そここは限なき概念的思惟が尽されなければならぬ。すべてこよつて課せられたもの、最も純粹に且つ有力なる表現を見出すことではなればならない。矛盾的自己同一のこは水自体が論理的でなければならぬ。純一無雜としてそこ^こ無^無

西田用紙

無限の動が含み居るのである。易行と云ふの主宰と安
 易と解する如きは、^{教小へかゝる}誤解でなければならぬ。^{種々の}
 甘藝術にしても、日本的と云は水もものは、^{何等かの意味に於て}すべ
 性質を具して居るものと思ふ。例へば、俳句の如くものであ
 つても、天地を^も最も^も純な^る表現^のに於て把握することになけ
 るばならぬ。永遠の今の自己限定の世界を、刹那の観念
^{に於て見る}
 が把握することになければならぬ。

矛盾的自己同一的な歴史的世界が自己自身を形成する
 に當つて、先づ種的形成的である。生命は種的形成から始ま
 る。併し種が^{自己}自身を越えて、^{自己}世界的形成の時、文化的

日本文化 何処までも種々ありなからし。

西川

日本文化

何千年来

である。文化的方向は種的形成を越えて種を定め方向では
 あるが、單なる種的形成の世界は人間の世界ではない。文化
 的なるかぎり、人間の世界即ち歴史的世界であるのである。
 主体と環境との矛盾的自己同一に於て、無限なる人間^{の歴史的}の生
 命があるのである。ヨーロッパは何処までも右^{其が主体的}民族^的であ
 りなから、之を越えて一つの世界であつた。支那は周代以来
 既に一つの世界であつた。天下であつた。支那は民族とい
 へば主体的といふ考は甚稀薄であつた。中^ん中^國と考へるは
 支那文化の^外に包攝せられたかぎり、中國と考へられたの
 であ^らず、日本は東海の孤島に位して、従つて世界として発達

之を離れし時、之は種を廢の

田田田

日本文化

した。主体即世界といふ文化形態を取つた。主体が多くの環
 境的否定を通さないで、自己否定^{世界的}世界となつたといふ形式
 によつて、発展し来存^{つたのである。}し、それが今日在る云つた如き日
 本文化の特色を造り上げたものと思ふのであろう。その思
 環境から非自己限定主体として、環境的ニ形成せし水た
 ヨーロッパ的世界と相互する両極上立つと考へ^{このことができた。}
 おり、併し世界は^{全体と環境との}何処までも矛盾的自己^的回^断作^る水
 たものから作つたものへとして、事^物に於て一となつたのである。
^{両方向}相互^{するものを水たはなう}と考へることは、^{東洋的}と考へることは、^{西洋的}と考へることは、
 である。タウトは日本ニ于一九〇〇年来その傳統たる單純

西田川

日本文化

性。主として、陳腐な衣裳まつけた道化芝居から蟬脱せんとす
 ヲヨーロッパの極めて眞撃を試み、最も大なる寄与を致した
 國である」と云つて居る。今日の日本は東海もはやの孤島に位する
 日本ではない、世界の日本である。ランケの所謂刻大な列
 強の一である。今日我國文化の問題は何千年來縦の世思と
 横日本文化の背景の世思との差を来つた縦の世思性材の特色を維持して、之を横
 の世界性へ擴大することを得なければならぬ。身心脱落
 脱落身心覚悟と云ふ如き柔軟心的文化の覚悟の擴大を以て
 しなければならぬ。主体として他の主体に對することなく、世
 界を以て他の主体を包むことを得なければならぬ。

■■■■

日本文化

而して矛盾的自己同一的^物な事^物に於て結合する一つの世界を構成することになければならない。私は東亜の建設者として日本の使命は此にあると思ひるのである。主^體として他の主^體世^界に對し、他の主^體を否定して自己の外に他を自己となさんとするの^は由^來精神^は存在^し如^きは所謂帝國主義^の外^にな^らない。日本精神^はは^ない。

我國は古來支那印度の文化、明治以後は西洋文化と種々外國文化を~~採~~採^取入^れ取^入れ、之を^理解^し之^を受^用する^に敏^なる^も、^獨創^的な^いと云^はれ^る。併し^は日本^は日本人自身固有^な物^の見^方考^へ方^があり、支那印度の文

西田

日本文化

化を取入れたから、日本人自身のものに創造し来たと思ふ。唯それは私の所謂継の世界として深遠とか雄大とか云ふ如きもの^{（その性質）}恨なきを得ない。之を及し人は日本精神と云ふもの^{（その性質）}を神秘的と非論理的な^{（その性質）}か子考へ^{（その性質）}私^{（その性質）}は之を交するものである。其も^{（その性質）}深い^{（その性質）}精^{（その性質）}緻^{（その性質）}に於て論理と云ふことは与へられたすべてのものの要求を^{（その性質）}総合統一して、一つの世界としてそれ自身に於て充足的な客観的表現を見出すことと与へること、否見出すこと^{（その性質）}で^{（その性質）}有^{（その性質）}る^{（その性質）}（性も）
 タウトが伊勢神宮について云ふ如く、それが眞の具体的知性と云ふものである。形式論理と云ふのは、かゝる知性の

X 主体即世界^的の性



西川

日本文化

単に環境的存在象的形式に過ぎない。科学と云ふものも、右
 の如き具体的知性の上よつて成立するのである。唯そ此は
 何処までも環境的である。藝術と云ふのは、之を互に主体的
 である。利^故科学的自己同一的世界の自己表現の両極に立つと
 云ふことが出来る。日本精神が主体即世界的な日本精神が藝
 術的として非科学的と考へる所以である。併し何れも
 物の眞実に行^{といふ}精神は、科学的精神に通ずるものでない。水
 はなすな^いい。藝術は右の如き意味に於て、知^{藝術}性的と考へない
 ものは藝術を知らざるものである。新は日本精神を非論
 理的^唯情意的として非論理的と考へ、神秘的と考へる如きは、

X (藝術は主体的、所謂主観的と考へる水)。非

西田

日本文化

却つて眞の日本精神は遠ざかるものであ
 り、~~か~~ ~~種~~ ~~は~~ ~~な~~ ~~い~~ ~~か~~ ~~と~~ ~~思~~ ~~ふ~~ ~~思~~ ~~ふ~~ ~~思~~ ~~ふ~~
 矛盾的自己同一的な我國の國體は、自ら法の概念をも含み
~~手~~ ~~に~~ ~~持~~ ~~た~~ ~~な~~ ~~け~~ ~~れ~~ ~~ば~~ ~~な~~ ~~ら~~ ~~な~~ ~~い~~ ~~皇~~ ~~室~~ ~~主~~ ~~個~~ ~~物~~ ~~的~~ ~~多~~ ~~と~~ ~~全~~
 体的—との矛盾的自己同一として作られたものから作
 るものへと云ふことは、何処も個物の独自性が認められ、こ
 とをなせばなすな~~い~~ ~~皇~~ ~~室~~ ~~主~~ ~~個~~ ~~物~~ ~~的~~ ~~多~~ ~~と~~ ~~全~~ ~~自~~ ~~立~~ ~~的~~ ~~な~~ ~~る~~ ~~も~~ ~~の~~ ~~の~~ ~~排~~ ~~他~~
~~自己同一~~ ~~排~~ ~~他~~ ~~と~~ ~~し~~ ~~て~~ ~~自~~ ~~的~~ ~~の~~ ~~王~~ ~~國~~ ~~と~~ ~~い~~ ~~ふ~~ ~~一~~ ~~面~~ ~~も~~ ~~な~~ ~~け~~ ~~れ~~ ~~ば~~ ~~な~~ ~~ら~~ ~~な~~ ~~い~~ ~~皇~~ ~~室~~ ~~主~~ ~~個~~ ~~物~~ ~~的~~ ~~多~~ ~~と~~ ~~全~~ ~~自~~ ~~立~~ ~~的~~ ~~な~~ ~~る~~ ~~も~~ ~~の~~ ~~の~~ ~~排~~ ~~他~~
 実践理性的なものも含まれな~~ら~~ ~~な~~ ~~い~~ ~~皇~~ ~~室~~ ~~主~~ ~~個~~ ~~物~~ ~~的~~ ~~多~~ ~~と~~ ~~全~~ ~~自~~ ~~立~~ ~~的~~ ~~な~~ ~~る~~ ~~も~~ ~~の~~ ~~の~~ ~~排~~ ~~他~~
 のから作るものへとして ~~個~~ ~~物~~ ~~が~~ ~~歴~~ ~~史~~ ~~的~~ ~~身~~ ~~体~~ ~~的~~ ~~な~~ ~~あ~~ ~~り~~ ~~物~~ ~~と~~
 於て自己と有つといふ ~~場~~ ~~か~~ ~~ら~~ ~~何~~ ~~処~~ ~~ま~~ ~~で~~ ~~も~~ ~~法~~ ~~律~~ ~~的~~ ~~な~~ ~~も~~ ~~の~~ ~~も~~ ~~な~~ ~~ら~~ ~~な~~ ~~い~~ ~~皇~~ ~~室~~ ~~主~~ ~~個~~ ~~物~~ ~~的~~ ~~多~~ ~~と~~ ~~全~~ ~~自~~ ~~立~~ ~~的~~ ~~な~~ ~~る~~ ~~も~~ ~~の~~ ~~の~~ ~~排~~ ~~他~~

皇

義は乃君臣情兼父子
 義は乃君臣情兼父子
 と云ふのは我國の美点である。

なげればならない。我國家は家族的と考へらる。主体即世
 界としての我國の歴史的發展と於て然考へらるものがあ
 る。義は乃君臣情兼父子
 長では無いと考へらる。皇室は縦の世界と
 矛盾的自己同一的の家族的團結と超越的のなげればな
 くない。天皇は歴史的世界の
 我々の臨むものでなげればならない。それは名令國家
 として法と云ふもの

Volonté

西田用紙